

仕える者になりなさい

奨励	韓 守信〔はん・すしん〕
奨励者紹介	日本キリスト教団長岡京教会牧師

一行はカファルナウムに来了。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

(マルコによる福音書 9章33―37節)

愛することとは

いつもは、日曜日の10時半に礼拝をささげています。私たちの長岡京教会は、この礼拝堂（クラーク・チャペル）の3分の1の広さでしょうか。とても小さくて狭いところです。けれども、イエス・キリストを唯一の救い主と信じる人たちとともに礼拝をささげています。そういった場所から出て、教会とは異なる場所で礼拝をささげられることは、私自身にとっても大きな学びとなりますし、何よりも本当に重要な働きの瞬間だと考えています。挑戦であり、刺激です。この礼拝の後も、天地万物を創造された神様から託された持ち場へと遣わされていきたいと願っています。この礼拝を通して、皆さんが神様と出会い、イエス・キリストに出会って、それぞれの持ち場で生きていくために必要な勇氣と力をいただいてほしいと心から願っています。

私自身、ここにおられる皆さんとは異なる類の名前を背負って生きてきました。広島で1970年に生まれ、そこで育って今年で42歳になりました。その途中、ところどころで人に迷惑をかけたことが、大きな問題なくここまで歩んでくることができました。本当に不思議でなりません。昨年から、京田辺キャンパスで春学期に3回、秋学期に3回、金曜日のランチタイムのチャペル・アワーの証し人として奉仕をさせていただいていますが、今出川では初めてなので、どんな感じになるのかと期待をしつつ来しました。楽しい時間になりそうで、ワクワクしています。自己紹介はこれくらいにして、聖書の御言葉に耳を傾けます。神の御言葉を皆さんの前ではっきりと証しさせていただきます。

先ほど、司会の三木先生から、春学期のチャペル・アワーのテーマが「愛は、すべてを完成させるきずなです」という紹介がありました。これは、新約聖書のコロサイの信徒への手紙3章14節からの御言葉です。このテーマにじかに繋がるのかという自分のなかでの疑問符も依然としてありますが、本日の聖書箇所を通して、愛という言葉について考えてみましょう。愛は一体何なのかということを自ら問いかけて考えてみる時間を、共に分かち合いましょう。

私たちは人間です。神様ではありません。ですから、ついつい自分のことを考えてしまいます。自己中心的になってしまいます。誰かに何かをしてもらうとうれしくなり、ありがたいと思います。しかしながら、誰かに何かをしたときにうれしくなるとか、感謝するということはあまりありません。そこで、愛について共に考えることによって、より具体的に「愛されること」よりも「愛すること」について、自分が誰かを愛することについて、生活のなかで私が気づかされたことや発見したことを皆さんに証しとして伝えます。そして、二つのことを皆さんにお願いしたうえで、自分の持ち場へ戻っていこうと考えています。

今日の聖書の御言葉は、イエス・キリスト（神の独り子、私たちの救い主。皆さんが認めようと認めまいと、皆さんお一人おひとりのために、神の独り子であるイエス・キリストは、十字架にかかり、皆さんの罪を贖ってくださいました）が、御自身と寝食を共にした12人の弟子たちに語られた御言葉です。つまり、私たちにむけて語られたイエス・キリストの御言葉ではありません。それにもかかわらず、この聖書の御言葉が私たち自身に与えられた御言葉であるということを思い、そう受け止めて、この聖書のなかに秘められている、行間に隠されている愛について考えてみましょう。愛することとは何なのか、ということについて考えてみましょう。

たかが70億分の1にしかすぎないけれども

先ほど、「二つのことを皆さんにお願いしたうえで、自分の持ち場へ戻っていこうと考えています」と話しましたが、まず一つ目です。私たち自身は、今日の聖書の御言葉を通して見るとき、「彼ら」のなかの一人にすぎないということです。自分自身にとって、自分はとても重要な存在です。価値のある存在です。誰からも愛されて、理解されたい存在です。しかし、現実をみると、現在、地球には70億人くらいの人間が生きていますが、そのなかの、たった一人にしかすぎないわけです。しかも、厳しい言い方をしますが、ここにいる私たちのうちの一人が、この世から今いなくなったとしても、明日も変わることなく日が昇ります。地球の大勢には、なんら影響ありません。そのぐらいの存在です。それにもかかわらず、自分自身がまるで地球のすべてかのように、自分のために日が昇り、自分のために日が沈み、自分のために雨が降り、風が吹いているかのように私たちは生きています。まず、私たちは、自分だけが地球に生きているのではないことを覚えるべきです。このことを謙虚に覚える必要があります。私以外の人も生きています。その私以外の人のなかには、自分が大好きな人もいれば、自分を育ててくれる家族もいます。辛いときに悩みを聞き、涙を流してくれる友だちもいます。その一方で、大嫌いで、顔も見たくもなくて、同じ空間にいただけでも辛くしてしまうような人たちもいます。自分自身が、さまざまな人たちと一緒に生かされている地球のなかの、たったの一人にしかすぎないということをまず覚える必要があります。しかし、そこで終わってしまうと本当に悲しいかぎりです。だからこそ、聖書の御言葉を通して、私たちがどういう存在なのかを確認したいわけです。

今日の聖書の御言葉はマルコによる福音書ですけれども、旧約聖書の創世記に「神は天地を創造された」と記されています。神様は、空をつくり、水をつくり、山をつくり、星をつくり、最後に人間をつくられたわけです。山や獣や草木をつくられたとき、神様は良しとされました。そして、私たち人間をつくられた後には、極めて良しとされました。すなわち、皆さんが存在することによって、神様は極めて良しとされました。そして、今日も極めて良しとしておられます。私たちは、そういう存在です。たかが70億分の1にしかすぎませんが、その70億分の1が神様を喜ばせ、神様をワクワクさせている存在であるということ、私たちはしっかりと覚えて生きていくことが大切です。つまり、ここで確認したいのは、皆さんにお願いしたいのは、神様を見上げて、神様のゆえに自己中心的にならず、周りの人のために生きていくことです。地球は、自分のためだけに回っていません。このことを忘れず、私だけではなく、今、工事しておられる方も、トラックを運転している方も、地下鉄の中の方も、みんな神様がつくられた方々なのだとことを覚えつつ、謙虚に歩いていく姿勢と思いを深めていきましょう。

私たち人間は、誰かの支えなしには生きていけません。このなかで、自分の力だけで生まれ育ってきたと思っている方はいらっしゃいますか、いませんよね。父親がいなければ、母親がいなければ、生まれたとしても誰かから愛情を注がれていなければ、誰も生きていけないわけです。私だけがそういう存在ではありません。この地球にいるすべての人たちがそういう存在です。そのなかの一人であるということを見て、人に接するとき、目の前にいるこの人も、あの人も、その人も自分と同じように大切なのだということを意識しましょう。たくさんいるなかの、すべてのなかの一人であるとまず覚えて歩んでいきましょう。このことを謙虚に心に刻み、自分の霊に目覚めさせていく私たちでありたいと願っています。このことをまず今日は皆さんにお願いしたいと、この場に来了。これが一つ目の証しです。私の心からのお願いです。

周りの人たちのために
自らを献げることこそが

次に二つ目です。さきほど指摘しましたように、私たちはたくさんいるなかの一人にしかすぎません。この自分をどのように活用していくべきでしょうか。神様から与えられた命を自分だけのために用いていくべきでしょうか。神を見上げながら、隣人のために用いていくべきでしょうか。究極的ですが、私たちはこの瞬間に大きな岐路に立たされています。これから、立たされ続けていきます。イエス様はおっしゃっています。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」。つまり、私たちには、自分自身を今日この瞬間も、出会う人たちに献げ、用いていくことが求められています。神様は、独り子イエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。それは、「自分はすごいんだぞ。地球をつくったんだぞ。俺はホンマにすごいんだから、お前たちは俺にただ従えばいいんだよ」という思いからではありません。実に自己中心的で、自分のことしか考えない私たちの罪を贖うために、私たちの苦しみを背負うために、私たちに永遠の命を与えるために、神様の独り子であるイエス様は、十字架にかかり、その3日目に復活なさいました。

そのイエス様がおっしゃっています。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と。本当に厳しい道のりです。辛い道のりです。平坦ではありません。つまずきもあるでしょう。落ち込むでしょう。絶望するでしょう。しかしながら、心の片隅にいつも留めておきたいことがあります。それは何かというと、自分自身の命を家族や隣人、出会ったことのない人のために用いていこうということです。周囲の人たちを支えていこうということです。苦しんでいる人のところに駆け寄って一緒に祈り、泣いている人のところに行って一緒に泣き、笑っている人のところに行って一緒に笑うことが、今、私たちに求められています。私は、はっきりお願いしました。あとは皆さんが決めてください。今後の歩みの方向性を選んでください。

皆さんと一緒に、イエス・キリストに倣って自らを周りの人たちのために献げていきたいと、心から祈っています。イエス・キリストはそうように話しておられるのだらうと、この礼拝の証しを準備するにあたり、祈りのなかで教えられました。今日は、皆さんとの初めての出会いにもかかわらず、皆さんにとって耳なじみのないことをお伝えしました。はっきりとお伝えしました。これが二つ目の証しです。私の心からのお願いです。

二つのお願いを
覚えつづけてほしい

是非とも、二つの願いを覚えて帰ってください。一つ目ですが、この地球は、自分だけのものではありません。自分自身が70億分の1にすぎないということを、そのなかの一人にしかすぎないということを謙虚に覚えつけてください。神様が皆さんのゆえに喜び、本当にワクワクしておられるということを覚えつけてください。二つ目ですが、私たちに与えられた命を自分のためだけに用いるのではなく、周りの人のために用いていきましょう。周りの人を支えるために全身全霊を注ぎましょう。

これら二つの願いを、十字架の救い主イエス・キリストの父なる神様のご支配のもと、この場所にて皆さんにしました。本当にうれしく思います。自分自身もそういった歩みをしていかなければならない、と改めて強く感じています。

今日の午後、皆さんが豊かな喜びとこのうえない感謝に包まれますように、心から願っています。皆さんの人生が、この世での歩みを終える瞬間まで、十字架の救い主イエス・キリストによる感謝と喜びでいつまでも満たされますように、心から祈っています。

2012年6月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録